

めようと、前に勤めた文房具店、印刷会社の方々から教わった事を参考にして、子供たちの使う技術的教材、家庭科の教材、理科関係の器材、それに薬剤（取り扱い免許取得しました）等の店舗を開き、七十二歳まで頑張りました。しかし、大型店舗の進出には勝てず、また高齢のため思うように活動できなくなり閉店し、現在妻と二人で健康第一に余生を楽しく暮らしております。倅は会社勤務で孫三人と共に近くに別居しております。

ともあれ「平和の礎」に多くの方々が申し述べております通り、戦争は二度と起こしても参加しなくてもなりません。

私は満州におりましたので戦後の引揚者の悲惨さはこの目で見、また聞いております。今だに残留孤児について問題も解決してありません。新聞紙上、テレビで見聞するたび胸が痛みます。

最後になりましたが、この度の戦争で犠牲になられました戦友諸兄の御霊に哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り致します。

満州の重砲兵

長野県 有賀 国雄

大正八（一九一九）年十一月、長野県上伊那郡西箕輪で生まれる。家族は、父義久、母くに子、それに姉二人、弟二人の五人兄弟の長男でした。家は養蚕を中心とした農家で、一町歩近い桑畑と三反歩ほどの稲作をしていました。

西箕輪尋常高等小学校を卒業して東京市江戸川区平井四丁目にあった畠山鉄工所に勤務しました。ここは当時軍の下請け工場として船のクランクを主体に製造していました。

この鉄工所には四年間勤務しましたが、勤務中の昭和十四（一九三九）年、伊那市図書館で行われた徴兵検査を受け、第二乙種でした。地元から検査を受けたのは六十人でした。それで昭和十五年一月十日、野戦重砲第七連隊要員として東京市世田谷の野戦重砲第八連隊に入隊しました。

昭和十五年一月十五日に兵営を出発、一月十八日、門司港で乗船、翌日釜山港に上陸しました。

ここよりは列車で、二十一日には鮮満国境の凶們を通過し、二十三日に斐徳に到着しました。配属部隊は野戦重砲兵第七連隊第一中隊となりました。

砲は一〇センチのカノン砲といわれました。カノン砲は野戦重砲の乙とも言われ、加農砲とも書かれます。相対的に砲身が長く弾丸のスピードが速く、遠くまで届き、装甲なども貫徹する威力がありました。

これより三カ月、いわゆる初年兵教育と内務班での訓育で、先輩に聞いている予想を超えるものでした。第一期検閲は四月二十七日に済み、七月十日に砲兵一等兵に命ぜられました。

冬季には零下三〇度にもなる野外での訓練で、監視、観測、通信、砲手、それぞれの訓練を受けました。第七連隊はノモンハン戦線にも出陣した関係で、砲は新し物が装備されていました。

上官は官舎に住み、私はその官舎当番となり、

食事の準備をしたりしました。またハルピンまでは一時間で行け、伝令役もしました。

翌昭和十六年二月二十三日、満州第三百一十一部隊第一期服務要員として派遣が命ぜられました。

この任務は伝令で、二十五日に東安省密山県斐徳を出発、二十六日には濱江省阿城に着き、約三カ月の勤務を行い、六月三日に原隊に復帰を命ぜられました。

直ちに濱江省阿城を出て、四日に東安省密山県斐徳に帰着しました。

昭和十六年七月二十二日、関東軍のいわゆる「関東特演」によって、臨時編成が下令され、二十八日には満州第八七三部隊石川隊に編入され、八月二日にこの編成は完結しました。

昭和十七年二月一日、「東安参一編第十八号」により満州第八五一部隊（第四国境守備隊砲兵隊）に転属を命ぜられました。

このため翌二日、東安省密山県斐徳を出発、虎林県を通過して東安省虎林県虎頭に到着し、満州

第八五一部隊石村隊に編入され、同月四日、満州第八五一部隊大津山部隊に配属となりました。

六日、東安省虎林県虎頭を出発、同日中に虎林県境を通過して、八日に濱江省哈爾濱に到着、満州第二五四部隊で特殊業務に従事しました。

三月十日、濱江省哈爾濱を出発、十三日には虎林県境を通過して東安省虎林県虎頭に到着しました。ムートン川を挟んだソ満国境です。

二十二日、満州第八五一部隊小野隊（列車砲）に編入され、四月一日には陸軍上等兵を命ぜられました。

列車砲は砲身長一・八メートル、重量一三六トン、弾量一六四キロ、最大射程五万メートルというもので、虎頭にあったものの、ソ連軍の侵攻のときは、移動のため分解中で、応戦できなかつたといわれています。

そして昭和十七年六月三十日に「昭和十七年軍令陸甲第四十号」により編成が改正となり、小野隊に編入されることとなり、同日に、この編成

も完結となりました。

昭和十八年三月七日、兵長を命ぜられ、内地へ帰還のため四月一日に虎頭を出発、密山県境を通過、三日に鮮満国境の図們を通過して、七日に釜山港を出て門司港に上陸、八日に大阪の野砲兵第四連隊に到着して第八中隊に転属、十日「現役延期解止」により満期除隊となりました。

除隊後は、畠山鉄工所に復職、昭和二十一年三月まで勤務しました。

ここに勤務中の昭和二十年三月十日の東京大空襲では、道を挟んだ隣まで空襲の焼夷弾で焼け、

小松川国民学校に消火に行った思い出もあります。その後、帰郷、家業の農業に戻り、四月に結婚、二十七、二十八年ごろまで養蚕を行い、野菜作りを主体としてきました。